

菅原 浩

SUGAHARA, Hiroshi

キーワード

井筒俊彦、ジョゼフ・キャンベル、シャーマニズム、ユング心理学、東洋哲学

Keywords

Izutsu Toshihiko, Joseph Campbell, shamanism, Jungian psychology, eastern philosophy

はじめに

今回は、かなり原理的な問題、つまり「そもそも」のレベルの話である。つまり、学問とか研究という、何事かを解明しようとする行為にまつわる「世界観の基盤」を問うことについて、神話というテーマから出発して考察してみたい。神話研究は私の探求してきたテーマの一つであって、『古事記の神々を読み解く』¹⁾という著書を出版したこともある。

神話研究の方法論については様々なものがある。古くはフレイザーに発する民族学的、比較神話学的方法は今でも行われているし、またエリアーデの原型論、ユング心理学による解釈、レヴィ=ストロースの構造論や、記号論的分析もある。山口昌男の『アフリカの神話的世界』²⁾は小著ながら様々な神話研究の方法論が並列されており、概観には便利である。また最近ではあまり聞くことがないが、1980～90年代にはジョゼフ・キャンベルの神話学は非常に人気があった。しかし現在の日本における知の状況においては、神話論が現代思想に対して何らかのインパクトを持つということはないようである。

また私がかつて特に興味を持っていたのは、神話の原型をシャーマニズム的な「歌語り」に求めるものであった。シャーマンが特殊な意識状態に入った上で、神話的リアリティ（とは何であるかは後ほど述べる）に関することを歌の形で表現したものとして神話はまず存在していたというのである。それが「古事記」のように文字に記録されたものはすでに「文学」のレベルに移行しているものであって本来の神話の形ではないともいう。研究としては沖縄に伝承されている神謡が注目され、それと古事記・日本書紀の古代歌謡や万葉集との関連が論じられたりしていた。古橋信孝や藤井貞和などの名が挙げられるが、特に古橋の古代歌謡論³⁾は、言葉の「呪性」というモチーフを突きつけ、大変刺激的なものであった。

1. 近代文化の中の非近代的な精神文化

ここで「そもそも」の論になるのだが、そもそも「呪性」という概念は近代の世界観にはなじまないものである。しかし古代的な世界を探求するにはその要素は欠かすことはできない。また別の面から言えば、そもそも近現代に至るまで、詩的言語の行為にはなんらかの「呪性」が内包されていると見るべきであって、それを捨象してはその本質を見失うのではなからうか。

ここで唆庵に富むのが井筒俊彦による『言語と呪術』⁴⁾であり、そもそも呪術が言語の出発点であることが論じられている。この論点はこの井筒哲学の「言語アラヤ識」説につながることになる。それは、そもそも世界という現象が成立するその水面下で動いているものとも言うべきであろう。

これは私のまた別の研究領域でもある「聖地論・パワースポット論」⁵⁾

にも関連する。結局のところ「パワー」とは何なのか、パワーを感じるとはどういうことか、というのは近代世界の文脈からすれば答えはないのである。

そもそも近代の世界観とはいかなるものであったかということだが、その特徴として「世俗化」をあげることができる。つまり、世界は普通人々が認識している世界以外は存在していない、言い換えれば「異次元の世界」というものは実在しないということでもある。ジェームズ・K・スミスがチャールズ・タイラーを読み解きつつ言うところによれば⁶⁾、近代の人間はこの世界のみならずフォーカスし、他の次元の世界が実在するという感覚を著しく弱体化させてきた。つまり、今自分たちが五感によって感じている世界は客観的実在であって、それ以外にはいかなる世界も実在しないという「近代人的な素朴実在論」が支配的であると言える。これに対して近代以外の人々の感覚では、自分たちの世界以外に「別の世界」が隣り合っていて実在しているのは当然と理解されており、その別の世界との交流とも時として起こるものであると認識されてきた。しかしこれは近代人の素朴実在論には受け入れられない。

実際、近代以降、大学を中心とする公式的（アカデミックという言い方もできるが）な知の制度においては、一部の領域を除いて、「素朴実在論的前提」によって成り立っていたところがある。たとえば一昔の前の人類学では、シャーマニズムや呪術といった、物質文明の発展していない社会には必ず存在するものについて、あくまで近代の世界観が納得できる「説明」を提供しようとしていたところがある。これは調査される向こうの人々にとって見れば一種の「知的植民地主義」ともみなしうるものである。そもそも異次元との交流など「あり得ない」ものであるという「常識」の上に「学問」が組み立てられていたのである。

もちろん、そこまであからさまな知的植民地主義は今はないし、現在ではその社会・文化の内側から内面的に読み解こうというアプローチになっている。が、そこでもたとえば「シャーマニズムにおいて体験されているのは本当に異次元なのか」とか、「そこで遭遇する精霊、神々とは実在するのか」といった問いが研究者から出されることは回避されているのである。

つまり、こうした非近代文化における精神文化、あるいは近代の渦中における非近代文化とも言える呪性を帯びた表現行為（たとえば詩や芸術）について語るとは実にトリッキーな行為なのである。下手をすれば容易に、近代人を納得させる説明を提示することで終わってしまうが、これは本質的には「裏切り」であって、知的植民地主義に陥っているのである。いま、マクロに見れば、私たちは近代文化の終わりを迎えているのであり、次なるパラダイムが求められている。それは「多次元的世界観」となるはずである。だが多くのいわゆる「学

問」では、まだ近代的素朴实在論の前提が崩れていないのである。

そうした「呪性」に視線を向け続け近代のパラダイムと格闘していたのがたとえば折口信夫であった。先にあげた古橋などの論はその延長線上にあるとも言える。もっとも呪性とは何であるかという本質に関する問いはまだそこにはない。

心理学者カール・ユングは非近代の精神文化（東洋、ネイティブ文化、西洋のヘルメティズムなど）に多大な関心を寄せていたことで知られている。日本では一時期、ユング心理学という傘のもとに様々な非近代的精神文化を語るというスタイルが流行した（湯浅泰雄などが代表的である）。もっともここでは「心理」という言葉が大変トリッキーなものであった。「深層心理」とか「無意識」という言葉を使えば近代人はあまり拒否反応を示さない。というのはその言い方をすれば、近代人の素朴实在論を侵すことなく、あたかも物心二元論の枠組みに収めることが一見できそうだからである。しかしユング自身はもっと過激な世界観を持っており、彼自身は近代的素朴实在論を信じていなかったはずである。彼にとってはあらゆる事象が「心的現実」だった。

話を神話に戻すと、たとえばある神話で「火の神」や「水の神」が語られたとする。それを世界各地の神話と比較して「火の神」の神話のパターンを見出すことができるかもしれない。しかし、ここで暗黙のうちに禁じ手となっているのは、「火の神とは本当に存在するのか」という問いである。あるいは「神とは何か」と言ってもいい。これは本質に関する問いであり、そもそも世界観全体を問題にせざるを得ない。その問いを発しないまま、なんとなく「火の神」というものがわかった気になった上で研究を進めることも可能であるのだが、研究者自身がそもそも「神」というものをどう考えているのかが見えることはほとんどないのである。なぜかといえば、もし「神」というものが実在するのなら、そういうものは「ない」という近代の知の素朴实在論的前提と抵触してしまうし、それはつまり「いかがわしい」とみなされるリスクが大きいだろう。しかしそもそも「実在する」とはどういうことなのであろうか？人間が実在する、自分が実在する、神が実在する、それはすべて同一の「実在する」なのであろうか。こうなってくると話は哲学の領域に入らざるを得なくなる。あるいは自分のよって立つ形而上学的前提を問い直すと言ってもよい。話がこと、「異次元」にあるものとみなされるものに関連してくると、どうしてもそういう世界観的問いを回避しつづけることはできないのである。

人類の文明史としては、AIを始めとする第四次産業革命が始まった1995年前後より、全く新しい文明期に入ったものと私は認識している⁷⁾。ここにおいて人類は世界観的な拡張を迫られている。近代の素朴实在論は認知科学からも否定をされており、量子物理学では実在と非実在は明瞭に分けられるものではない。さらに、根本的に近代のパラダイムでは、意識の深層にある世界はまったく捕捉できない。

2. 井筒哲学と多次元的世界観

ここにおいて、新しい文明期における世界観の核となるものとして、井筒俊彦の哲学に注目すべきである。それはなぜかといえば、井筒哲学は、ギリシア、インド、イスラム、中国といった伝統文明の世界観の集約であり、人類の叡智的伝統のエッセンスを提示したものと理解できるからである。それはまたシャーマニズムや古代の瞑想的伝統における意識体験の次元を包含している（井筒哲学の原点がシャーマニズムであることは安藤礼二⁸⁾によっても指摘されている）。それはまた、別のアプローチから人類の深層意識体験を研究したスタニスラ

フ・グロフなどトランスパーソナル心理学とも基本的に一致するものである。グロフ⁹⁾は、意識の基本的なベクトルとして「ホロトロピック」と「ハイロトロピック」の2つがあることを指摘する（ホロは全体、ハイロは物質を意味する）が、これは井筒哲学で言えば「無分節」に向かうベクトルと「分節化」のベクトルにほかならない。これはまた「陰」と「陽」でもあるだろうし、またギリシア哲学のエンペドクレスの語る「争い」と「愛」でもある。

すなわち、原初には「ただ一つなるもの」(無分節)があり、これが様々なに分かれて諸世界や諸存在が生まれた(分節)ということになる。これは「一即多」あるいは「一切即一」でもあるし「空即是色」でもあるのだ。結局、伝統文明における哲学はみなほぼ同一のアイデアに基づいていることになる。なお、これを神話的イメージで表現したものが「宇宙卵」の神話であろう。

ここからは当然ながら多次元的な世界観が導き出される。そこまで井筒は明確に述べているわけではないが、この原初の一から分節化して出現する世界が一つであるとは考えられないからである。一から出現する世界は無数にあり、その世界ごとにたとえば物質や意識の独特な構成があると推定できる。たとえば人間の経験している世界が意識と物質が別々であるかのような感覚が強いのは、この世界の構成原理であって、他の世界ではまた別の構成原理があり、そこでは物質と意識の分離感のごく薄いものであるのかもしれないのだ。ここからまた推定できることは、たとえば人類の世界において存在していると理解されている自然法則・物理法則というものも、その世界の構成原理であって、それがまた別の世界にそのまま適用されうると考える根拠は必ずしも明瞭ではないということだ。

ここまで考えれば、世界は「多次元」であり、人類が経験している世界以外にも世界はありうることになるだろう。そもそも人類の世界そのものも、原初の一から見れば実在しているわけではなく、一面から見れば仏教などで言うように幻想の世界である。つまり人類の世界は人類が集団的に見ている夢のようなものとも言う。しかし宇宙には別の「夢」の世界が多数あるのであって、そこにはまた人類ではない意識存在とそれが経験している世界の地平があるのだ。

人間が経験する「心」も「物質」もその世界構成の分節としてあるもので、どちらも一次的なものではない。先行するのは世界構成の「地平」なのである。それは現象学も気がついていたことであつた。唯心論でも唯物論でもなく、「唯地平論」である（これは実は仏教哲学の「唯識」に近い考えではなからうか）。それをさらに拡張して考えるならば、この宇宙には無数の「地平」が存在するのである。人類の世界構成の地平はその中の一つに過ぎず、他の存在者はそれぞれ別の地平を持つ。こうした世界観がこれから多次元的な世界観である。

これまで「人類ではない意識存在」について語ることは知的世界においては大きなタブーであり、非常識とみなされてきた。しかしこの数年で状況は変わってきており、米国ではいわゆるUFOについての議会公聴会が開かれる^{*1}など真剣な討議の対象となつてきている。もはや人類以外の意識存在の存在を頭から否定することはできない。

さきほど「そもそも神とは何か」という問いを提起した。しかし、人類以外の存在について、これまでの名称、つまり神々、精霊、天使、あるいは宇宙人といったものは、すでに適当ではないものになっているのではないか。いわゆる宇宙人というものは人類と同一の物理世界に存在しているものだが神々や精霊は見えない世界にある、などという分類は古いものではないのか。そもそも人間が理解している物理法

則が全宇宙に適用されるという考え方そのものが疑わしい。意識存在とその環境世界は一体として、原初なる一の部分世界となっているという見方から言えば、人類以外の存在は人類とは異なる世界分節を経験していると考えるのが自然である。ただ、モノダは閉じてはいないとか、異なる世界分節を生きていても他の世界分節の領域と交流することが絶対に不可能であると断定する根拠もない。人類以外のいわゆる宇宙人と呼ばれる地球外意識体があるとすれば、彼らは何らかのテクノロジーにより、人類の世界分節と同調してこちらの世界において知覚可能にするという能力を有しているのかもしれない。そもそも古代のシャーマンが異次元を体験したのも、エリアーズが言ったように「意識の技術」だったのではない。

最後に、先に触れたジョセフ・キャンベルの神話学は、井筒哲学のパラダイムから見て再評価しようという点について述べたい。キャンベルは特に『千の顔を持つ英雄』¹⁰⁾など英雄神話論が知られている。英雄は、故郷を立出し、異郷で冒険し、そしてまた帰還するというサイクルをなす構造をしていると指摘する。またキャンベルは単に英雄神話だけではなく、多くの神話もまた根本的には立出・冒険・帰還の構造をなしていると言う。それは宇宙生成と宇宙の終わりというサイクルに対応することを、インドの哲学も引用して語っている¹¹⁾。つまりここでは神話も哲学（近代的な意味ではない）も同一の想像力から発しているというヴィジョンを提示しているのである。

そもそも、無分節・分節パラダイムの世界観においては、原初の一より分離した世界が出現し（本当は「出現」という言い方は時間軸を連想させるため適当ではないが、これは人間の思考形式の限界ともいえる）、それはまた無分節に戻ろうとするベクトルを持つ。これが陰と陽の限りない回転とも言えるし、空海の言葉を借りれば「阿字の子が阿字のふるさと立ち出でてまた立ち帰る阿字のふるさと」である（阿字とは原初の一のことであり、密教的に言えば大日如来である）。

つまり、神話的想像力は哲学に先行するのである。人類の想像力には元型的パターンと言うべきものがあり、それが、原初の一、分離、また一への帰還というパターンだということである。なお、M.H. アイブラムズも『自然と超自然』¹¹⁾において、ロマン主義文学は全体として一への帰還という神話の構造を持っており、それはプロティノスの哲学と比較できると論じている。ということは井筒哲学とも一致するということである（井筒哲学は特にプロティノスの影響が強いと思われる）。

この視角からすれば、たとえば、古事記や日本書紀の神話も、天地開闢から世界の成立を語っており、それは原初の一から諸世界が出現するという構造と一致していると見られる。

まとめと展望

本稿では新しい世界観に基づいて、神話やまた神話に登場する人類以外の存在者について新たな視角を得るためのヒントを探求した。新しい文明期の世界観の枠組みは井筒哲学に表現された「一即多」とも言える伝統文明のエッセンスに基づくべきである。ここから見るととき、神話を見ていくポイントは次のようになるだろう。

- 神話は意識の深い層におけるリアリティに関連しているという可能性。これについてはユング心理学からのアプローチが試みられていたが、「意識の深い層」は同時に「異なる世界」でもあるという理解を持つこと。

- この意識＝世界層特有の言葉の作用、呪性というべきものを、詩的言語との関連において考察し、言語と意識の根源を探求すること。
- 我々は多次元世界において他世界と交流する可能性のある存在であるという認識のもとに、神話のリアリティを読み解くこと。神々・精霊などと呼ばれていた存在は、人類の頭の中のみで生み出されたものではなく、異なる世界の地平において存在するものとの交流から生み出されたという可能性に気づくこと。

まとめていえば、私たちの世界構成の地平の「彼方」との交流、それが人類文化においてこれまで「聖」の領域（エリアーズ的な意味で）として持続していたものだった。私たちはこれから唯地平論的な多次元的な世界観に立って、その地平の向こうにあるものとの交流を真剣に考えるべき時を迎えている。近代世界は、人類がその自らの世界のみしか目を向けていなかったという意味で「鎖国」的な状態であった。

そこで「呪性」あるいは「聖性」と言われる次元の本質も垣間見ることができよう。すなわちそれらは、人間が自らの「世界構成の地平」の外側にあるものと接触する経験であると見ることができる。この日常の自明性の地平を唯一の現実だと考えることなく、現実には常に世界構成作用によって作られている（その意味で言えば仏教で言うように実在ではなくイリュージョンであるとも言える）という「唯地平論」に立つならば、この世界には常に境界があり、境界の外側と接していることは明らかである。この世界の内側と外側を同時に見る視点が必要なのである。山口昌男の現象学的な記号論的分析も、そのような見方へ発展する可能性があったように思う。

この視点はまた芸術論にも適用することができる。たとえば伝統的なヨーロッパ文明では、芸術とは人間界よりも「高い次元」のものをこの世界に下ろして表現するという見方が存在していた。しかし一切の異次元をすべて説明や解釈から排除しようという近代文明では、こうした解釈は回避される（これはいわゆる「オッカムの剃刀」以来の伝統だろう）。それは間違っていることが証明されたわけではなく、単にそうした立場を理解することが、特に知識人といわれる人々には困難になったため人気がなくなったのである。

しかし、芸術の原点はシャーマニズムであったという考え方もある。およそ異次元との交流という視点を排除して、芸術行為あるいは詩的行為の本質を理解することができるのだろうか。芸術家・詩人は近代における原始的な存在でもある。彼らを近代文明の持ち合わせる語彙だけで解釈しようとするのはまた一種の知的植民地主義に陥る危険もあるだろう。そもそも近代的合理主義への異議申し立てであったロマン主義運動には、原始的な感覚を再興しようとする動機が含まれていた。私たちの世界の地平そのものが実は広大な「異界」に包囲されているという世界感覚を思い出すならば、芸術に関する見方も変わっていくことだろう。すなわち、神話論の変革は芸術論の変革ともつながっていくはずである。

注釈

- * 1 <https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2023-07-27/RYETY6TOAFB401>
2023年9月21日閲覧

参考文献

- 1) 菅原浩：古事記の神々を読み解く、アルテ、2011.
- 2) 山口昌男：アフリカの神話的世界、岩波書店、1971.
- 3) 古橋信孝：万葉集を讀みなおす—神謡から“うた”へ、日本放送出版協会、1985.
同：古代和歌の発生—歌の呪性と様式、東京大学出版会、1988.
- 4) 井筒俊彦：言語と呪術、安藤礼二・小野純一訳、慶應義塾大学出版会、2018.
- 5) 菅原浩：パワースポットのパワーとはいかなる意味か—生氣論の復権に向けて、長岡造形大学研究紀要、Vol14, pp.35-40, 2017.
- 6) James K. A. Smith: How (Not) to be Secular: Reading Charles Taylor, Eerdmans Publishing, 2014.
- 7) 菅原浩：新文明期への移行と哲学の再定義—新たな時代区分に基づく考察、長岡造形大学研究紀要、Vol.15, pp.22-28, 2018.
- 8) 安藤礼二：井筒俊彦 起源の哲学、慶應義塾大学出版会、2023.
- 9) スタニスラフ・グロフ：脳を超えて、吉福伸逸・菅靖彦訳、春秋社、1988.
- 10) ジョゼフ・キャンベル：神話のイメージ、青木義孝訳、大修館書店、1991.
- 11) M.H. エイブラムズ：自然と超自然—ロマン主義理念の形成、吉村正和訳、平凡社、1993.